新発田市の地域観光情報とダークツーリズム

一　戸　信　哉

はじめに

近年、地域社会の環境の変化は、地域振興の手段として観光への期待を増大させている。日本の少子高齢化の見通しは厳しく、地域社会の持続可能性が危ぶまれる中にあって、観光は交流人口の増大につながり、中山間地や離島など過疎化が進む地域での雇用ももたらす有効な手段になるだろうという趣旨である。また訪日外国人観光客の増加は、大都市圏から地方への波及も見られるようになり、急激に全国で「インバウンド観光」への期待が高まっているといってよい。平成30年の観光白書では、第II部のタイトルが「日本経済における存在感が高まりつつある『観光』」となり、訪日外国人観光客の消費動向が主に分析され、宿泊業のみならず、医薬品・化粧品販売など小売業への経済効果、さらには越境EC（帰国後も日本の製品をネット通販で取り寄せる）への波及効果にも言及されている。観光の「日本経済における存在感」の高まりは、訪日外国人観光客の増加によるものと見られている。

この期待感の中で、都市部以外の「地方」がそれぞれ観光に関する「情報発信」に取り組むのだが、そこにはどうしても困難がついて回る。というのも、どこの地方でも、「豊かな自然」と「おいしい食べ物」がキャッチフレーズになることが多く、それに温泉や歴史、アウトドア活動などが追加されるにとどまり[1)]、ほとんどの「地方」が同じような特徴を打ち出してしまいがちなのだ。この状態では、地域間競争から抜け出すのはもちろん、独自の特徴を打ち出すことさえ困難であろう。

一方、観光の主役である個人から見ると、ICTを利用した利便性の向上が、さまざまな変化をもたらしている。その結果として、個人・グループ旅行が増加し、オンラインでの間際予約など柔軟な旅行計画を立てやすくなり、従来の「見る、食べる、遊ぶ」という消費だけでなく、「産業観光」や「街歩き観光」などへの関心も高まっている。こうした関心は、これまで観光ルートの構築においてはマイナーな存在として無視されていた、隠れた観光資源が注目されるきっかけにもなっている。隠れた観光スポットへの導線は、地元の丁寧な設計が期待されるものであるが、旅行者自身が「口コミ」によって共有し、そこから地元が気づかなかった導線が発見さ

れることもありうる。楽観的な見方に立てば、地元と旅行者の情報発信が車の両輪となって、良質な「口コミ」を「拡散」し、次の顧客を呼び込むということになるのだが、そのように観光振興の担当者の思惑に沿うとは限らない。ときには悪評が拡散していくこともある。またその一方で、「明るい観光」を推進している側が無視している、あるいは注目していない、「悲しみ」や「負の歴史」に特徴づけられる観光スポットが意外な形で注目されることもあり、それもまた観光の一つの側面となりうる。

本稿は、悲しみの歴史をたどる「ダークツーリズム」から観光情報の可能性を検討した上で、「ダークツーリズム」の適用事例として、新潟県新発田市の可能性を探る。

1.「ダークツーリズム」に関する観光情報の可能性

本来個人的な体験であるはずの旅は、今日 ICT 利用の浸透により、これまでのパッケージ化された形式から解放されてきている。たとえば、美術館や博物館の音声ガイドシステムは、これまでの館内でレンタルする方式から、スマートフォンアプリを利用した方式に移行している。これにより、ガイドの内容を旅の前や後に確認することも可能になり、訪問先での理解をさらに深めることが可能になってきている。

もちろん、ホテルや移動手段など旅の「手配」においてもインターネット経由での取引が完全に定着している。最近は、いわゆる C2C、消費者同士の取引の仲介を、宿泊の領域で実現した、Airbnb のようなサービスも広がってきている。タクシーに競合するサービスとしても、米国の Uber や中国の Didi といった事業者が人気を博している。日本では Uber が一部地域でサービスを開始したが、自家用車によるサービスは「白タク行為」にあたるという国土交通省の指摘により、サービスを中止しており依然課題もあるが、既存のタクシーの配車もインターネット経由で行う動きが広まっている。こうした旅の変化の過程で、新たな観光のあり方として、これまでの「明るい観光」と対比する形で注目されているのが、「ダークツーリズム」である。ここでは、地域観光情報の観点としての「ダークツーリズム」の有効性について考えてみたい。

日本で「ダークツーリズム」という概念を積極的に提唱している研究者として、観光学者の井出明が挙げられる[2)]。井出によれば、ダークツーリズムとは、「戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶を巡る旅」と定義される。もともとは、1990 年代に J. John Lennon と Malcolm Foley が提唱したのが始まりとされていて、英国では 20 年以上の研究の蓄積が

ある[3]。この旅をどう意義付けるかという点について、いわゆる「観光振興」のような視点はとりあえず横におき、悲しみの場所を訪れることの個人にとっての意味を、井出は強調している。たとえば、戦争や災害で犠牲者が出た場所を訪れることで、犠牲となった人々を記憶し、その災害や戦争からの教訓を受け継ぐことができる。またハンセン病の病歴を持つ人々への科学的根拠のない差別について、もしその悲しみを承継していれば、原発事故後に発生した科学的無知によるいわれなき差別を避けられたのではないかという点も指摘し、こうした点を解消できる営みとして、「勉強」というような大げさな形ではなく、現地を訪れる中で自然に悲しみの承継ができるダークツーリズムが有効だと、井出は主張している。

近年注目を浴びつつあるダークツーリズムだが、「ダーク」という言葉の響きを敬遠する向きもある。たとえば、観光庁はダークツーリズムという言葉を用いず、「ニューツーリズム」という概念を物見遊山とは一線を画する観光として位置付けていて、ダークツーリズムの趣旨も、「文化観光」や「エコツーリズム」とともにこの中に含ませているように思われる。また災害に関連しても、「明るく元気に頑張る被災地」というコンテキストが重視され、ダークツーリズムは嫌われる傾向にある。たとえば、宮城県女川町で、七十七銀行女川支店の従業員が、管理職の指示によって屋上に避難して、亡くなった事例が挙げられる。この件では、遺族が銀行側の避難誘導のミスを指摘して訴訟に発展した。このように犠牲になった人々を慰霊していく中では、「権力や体制から一定の距離を保ち、声なき民の悲劇を記憶するタイプのダークツーリズム」が成立することになるが、これは一般的な文脈での「明るく元気に頑張る被災地」という考え方や復興観光とはかなり趣が異なる[4]。それゆえに「ダークツーリズム」という言葉が敬遠されるのだが、井出はこうした言葉の置き換えによるおためごかしをすべきではなく、ダークサイドから教訓を引き出し、さらに生き方の覚醒や社会構築にまで波及させていくべきと主張している。

ダークツーリズムを既存の観光振興の中に取り入れていこうとすると、「明るい観光」とのバッティングが生じることも多いのだが、ICT やソーシャルメディアとの親和性はむしろ高いと見ることができる。まずなによりも、ダークツーリズムに関心を持つ層は、経済的な余裕があり、教養もある人々が想定されるので、デジタル機器にも関心と理解のある人が多い。また実際の観光情報としての発信においても、印刷して配布されるようなメインのコンテンツにはなりにくいものの、関心のある人に適切に情報を届ける際に、ウェブでの情報発信が有効に機能する可能性がある[5]。もち

ろん、個人的な体験をSNSを通じて共鳴を引き起こす作用は、むしろダークツーリズムのような領域において有効に機能するだろう。

2．新潟県及び新発田市の観光の現状

新潟県には30の市町村があるが、歴史文化領域の資源を活かした観光の可能性について、新発田を題材にして考察する。まずは新潟県及び新発田市の観光について概観する。

新潟県は、三大都市圏、あるいは日本海側の各都市圏との比較において、観光の立ち遅れを指摘されることが多い。現状を見ていくと、新潟県観光入込客統計では、2017年の観光入込客数は7247万人、過去10年間を通じて、7000万人前後で安定している[6)]。

一方、外国人観光客については、2017年の県内延べ外国人宿泊者数が315400人泊（前年比18.1%増）となっている[7)]。外国人観光客は、近年全国的に大幅な伸びが見られているが、地方部の訪問者数が徐々に増加傾向にある中で、少なくとも2017年についてはその波及効果が新潟県にも及んできているようにも見える。ただし同期の宿泊数を隣県と比較すると、長野県が129万人泊、石川県が約78万人泊となっており、成果の面ではまだ大きな差がある。

新潟県はこうした状況に対応すべく、2017年3月に「新潟県観光立県推進行動計画」を発表、数値目標を示している。この中では、観光入込客数8000万人、外国人宿泊者数50万人泊まで引き上げるという目標を掲げている[8)]。

日本政策投資銀行新潟支店は、毎年同行が行っている「アジア8地域・訪日外国人旅行者の意向調査」に基づいて、新潟のインバウンド観光に関する調査結果を発表している。2018年8月の調査レポートによると、新潟県を訪れる外国人観光客の多くは、冬場に魚沼地域を訪れる傾向が顕著で、12-3月期が全体の65%前後を占めているという[9)]。

つづいて、新発田の観光に焦点をしぼって検討する。新潟県観光入込客統計から、新発田市の観光入込客数を見ていくと、2017年は260万人で前年比5.2%減、例年250万人前後で推移している。このうち、60万人強が月岡温泉を目的とした訪問者で、他の温泉と合わせて90万人ほどが「温泉・健康」を目的として新発田市を訪問している。これに対して、「歴史・文化」カテゴリーに設定されているものは、新発田城のみで、これを目的とした観光客はわずか5万人に過ぎない。新発田観光のコンテンツとして新発田城、あるいは「歴史・文化」カテゴリーをとらえたとき、この調査

を見る限りでは、「キラーコンテンツ」としての大きな寄与は見出せない。他の市町村の「歴史・文化」カテゴリーに入っている観光地のうち、新発田城に比べて集客力が高い、10 万人以上の入込客数実績があるのは、以下の施設である（数字は 2017 年の観光入込客数）。

新潟市	白山神社（初詣を除く）	698,000
	新潟市水族館（マリンピア日本海）	532,560
	県立自然科学館	238,700
	県立植物園	235,230
	動物ふれあいセンター	324,340
	新潟市マンガ・アニメ情報館	108,960
弥彦村	彌彦神社	1,270,790
長岡市	宝徳山稲荷大社	109,600
	寺泊水族博物館	114,640
見附市	みつけイングリッシュガーデン	140,939
南魚沼市	牧之通り	108,490
上越市	春日山城跡	253,920

水族館などファミリー層に適した施設は、同じ「歴史･文化」カテゴリーでもやや性質が異なるが、上越市の春日山城跡は、新発田城と同じ性格のものと評価しうる。また、伝統的な雪国建築をいかした街路整備により、都市景観大賞、アジア都市景観賞などを受賞している南魚沼市の牧之通りも、歴史的な観光資源を生かしている事例と見てよいだろう。

新発田市の観光 PR においては、「歴史・文化」のコンテキストでもっとも重視されているのは新発田城及びその周辺の観光地である。新発田市観光協会のウェブサイトや冊子の中でも新発田城が表紙を飾ることは多く、2018 年 11 月現在配布されているパンフレットでも、新発田城が表紙となっている。このほか、庭園の清水園、石泉荘、寺町など市内中心部の寺院が紹介されていることが多い。もちろん、月岡温泉も大きな扱いになっているが、市内中心部の「歴史・文化」をめぐる場所との間には、物理的な距離があり、連動性が弱い。

3．新発田市の観光資源とダークツーリズム

新発田市の観光の文脈において、個人旅行に適したテーマ性のある観光、その中でもダークツーリズムに適したような素材にはどんなものがあり、現在どのように取り扱われているか。本章では、いくつかの可能性を検討する。

新発田市観光協会は、市内中心部を個人観光客が「街歩き」をするためのモデルコースを紹介する取り組みをすでにスタートさせている。2018年11月現在紹介されているのは、「義理と人情　堀部安兵衛を偲ぶ旅」である[10)]。赤穂四十七士の一人堀部安兵衛は、新発田藩士中山弥次右衛門の息子であったが、13歳のときに家が断絶、江戸へ出る。その後、高田馬場の仇討ちによって名を挙げて、赤穂浪士堀部家の婿となり、討ち入りに参加する。堀部安兵衛が新発田藩出身であるということにちなみ、新発田市内のゆかりの地を歩いてめぐるのが、このモデルコースとなる。堀部安兵衛像は新発田城の大手門前に設置されており、新発田城とともに見学することができる。堀部安兵衛像を見学した後、安兵衛生誕碑、安兵衛の生家中山家の菩提寺長徳寺にて、赤穂四十七士の木造が収められている義士堂を見学するというプランである。赤穂浪士や堀部安兵衛はよく知られているが、新発田とのつながりが広く認知されているとはいい難い。新発田と赤穂浪士をつなぐ、新発田市内の「点」をつなげて「線」とすることにより、旅行者が自ら情報を見つけてたずねることができるよう「見える化」を行っているという点は評価すべきだろう。

一方新発田市では、城下町から軍都、さらに今日に連なる歴史の積み重ねを、観光資源としていこうという動きが見られる。新発田城を中心に観光資源を組み合わせていくと、江戸期の溝口家による新発田藩統治を中心にすることになり、これは地元関係者のマインドに適合的ではある。だが、「お城と殿様」というテーマ自体に他地域に比べた有意な特徴を見出すことは難しく、城のたたずまい以外に大きな関心を呼ぶものがあるとはいい難い。むしろ軍都として、近代日本の明治維新から太平洋戦争にいたる経験を記憶する町であるということに、あるいはそれが城下町のイメージに付け加わることにより、「ダークツーリズム」との接点を見いだせる可能性も感じられる。

この手がかりになりそうなものとして、2012年度から2014年度にかけて、文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業」として、新発田市が歴史的建造物等調査事業を行い、この調査に基づいて発表した「新発田市市街地文化遺産活用構想」（2014年3月発表）に注目したい[11)]。この構想の

中では、新発田市の中心市街地には「さまざまな時代背景による多様な文化遺産が集中」しているが、「歴史文化の厚みを感じられるまちになっていない」と問題を指摘し、「刻（とき）をつなぐまち」というコンセプトを提言している[12)]。その後、同事業では、新発田藩から会津藩に向かう「会津街道」に注目し、街道沿いに発展した郊外各地区の建造物調査も実施している。

これらの調査の過程では、住民が建造物の価値を再認識し、文化遺産を活用する動きも見られた。文化庁報告書の中では、中心市街地に残っている「白勢長屋」（しろせながや）の活用の動きに注目し、以下のように報告している。

白勢長屋（2014 年２月筆者撮影）

「平成 24 年度から実施している歴史的建造物調査では、調査の過程で住民がその建造物の価値を再認識できたことで、住民主体で自発的に文化遺産を活用する取組の実現に繋がりました。具体的には、新発田市中心市街地に現存する『白勢長屋』という明治時代に建てられた長屋の調査を実施した際、その長屋の調査に立ち会った住民の一人が自分の住んでいた長屋の歴史と価値を再認識し、『自分の育った長屋を開放して、人々が気軽に集まれる場を作りたい』と考えたことから、市民有志で長屋を活用した『つっとよってけ白勢長屋』というイベントを開催するに至りました。このイベントでは、集まった市民有志が

長屋の土間や軒先を使って雑貨や野菜の販売、アコースティックギターの弾き語りなどを行うとともに、長屋の一角の公開・見学ツアーや、住民による手作り豚汁の振る舞いなど、長屋に住む住民が来客をもてなすような温かいイベントとなりました。今後も、これまでの調査結果や策定した構想の内容、事業成果物を活用した新発田市の文化遺産を活かした取組を進めてくこととしています。」

歴史的建造物の「長屋」としての価値が注目されたこの建物だが、2016年に一部の所有者が取り壊しを行ったことにより、「長屋」としては分割されてしまう。この出来事を受けて、新発田市は歴史的建造物を指定して、その保存を支援する「新発田市歴史的景観形成建造物指定制度」を導入する[13)]。この制度では、新発田市景観計画に定められた「歴史景観エリア」にある建造物で、「建築後、おおむね50年を経過したもの」の中から「歴史的景観形成」に寄与する建物を指定し、外観保全のための修理工事や修景工事の費用を補助している。

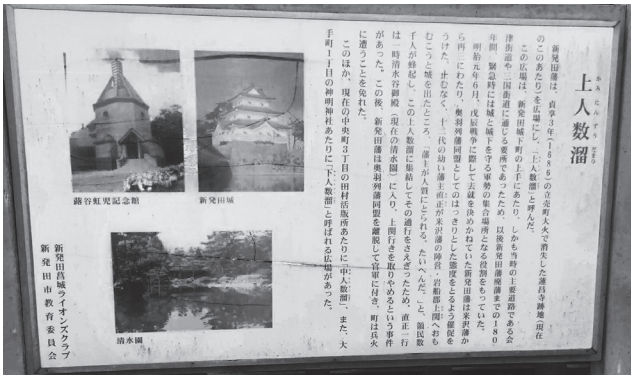
本稿の関心から言えば、建造物の保護と同時にその価値が評価され、「観光情報」に結実していくところが重要であるが、白勢長屋に見られるように、社会的な関心の高まりと所有者の意向との間のギャップにより、建物自身の保存が難しいケースも少なくない。新発田市の制度では、「歴史的景観」を形成する建物の範囲を「建築から50年」として、比較的新しい建造物も対象にする形で設定しており、現状では1960年代までの建造物が対象になりうることになる。従来の観光情報では見逃されていた、比較的最近のストーリーを含んだ建造物が保存され、ダークツーリズムの手法が妥当するような観光に転化していく可能性も期待できる[14)]。

3-1．新発田市内の戊辰戦争に関連する史跡

市内中心部で見落とされがちな「歴史」的な観光資源には、戊辰戦争をめぐる新発田藩の新政府軍への加勢、旧陸軍新発田歩兵第16連隊の激戦地での働きなど、「ダークツーリズム」が扱う近代の「悲しみの記憶」を象徴するような場所が多い。それだけに地元では「扱いにくいテーマ」となっているのだが、ダークツーリズムポイントとしては、非常に価値が高いとも言える。

1868年7月、戊辰戦争の過程で、新発田藩は新政府軍を支持し、領内に上陸をさせる。当初奥羽越列藩同盟への加盟を求める圧力を受けて、同盟に加盟した新発田藩だが、家老窪田平兵衛が京都で行っていた情報収集

により、早くから新政府軍が優勢であるという情勢判断をしていた。新発田藩の苦しい立場とこれを乗り切った老獪さを象徴するのが、同年６月７日の「領民蜂起」である。この日、同盟側の米沢藩の要求に応じて、越後上関（現在の岩船郡関川村）での軍議に向かおうとする藩主溝口直正を、竹槍を持った領民たちが道を塞いで阻止したとされている。「領民」とされているが、実際には藩士が変装して紛れ込んでいたという説もある。新発田でのこの動きに呼応する形で、窪田平兵衛らは京都で新政府に対して申し開きを行い、最終的には新政府軍を領内に上陸させている。この領民蜂起は、新発田市の寺町地区にある上人数溜（かみにんずうだまり）と呼ばれる広場に集結して行われ、遮られた藩主は清水谷御殿（現在の清水園）に滞在したとされている。上人数溜の看板は、現在寺町地区に設置され、このときの経緯が説明されているが、観光ルートの中に組み込まれているとはいえない。



上人数溜案内看板（2018 年 10 月筆者撮影）

清水園から徒歩数分の場所にあるこの場所を、清水園とともに訪ねるルートは、越後の小藩であった新発田藩の情報収集能力に思いを巡らせるには最適の場所である。新政府軍と旧幕府軍・奥羽越列藩同盟に分かれた戦いという単純な構造ではなく、戦乱に巻き込まれた小藩がどのように立ち振る舞うことを求められたか、明治維新・戊辰戦争から 150 年を経て、考えを深めることができる。観光情報の充実という観点からは、新政府と旧幕府軍の間の「正義」をめぐる議論を超えて、当時苦悩しながら生き残りを図った新発田

藩の動きを理解できるような情報提供が、望まれるところでもある。

太夫浜、松ヶ崎浜（現在の新潟市北区）から上陸した新政府軍は、1868年８月、新発田藩と会津藩との国境である山内口留番所付近、現在の新発田市山内と赤谷の間で、会津藩と戦闘を行っている。山内及び赤谷は、もとは会津藩と新発田藩にまたがるエリアで、現在はいずれも新発田市となっている。山内地区には「山内口留番所」の案内看板があるほか、番所のあった場所に、山内口留番所公園が整備されている。新発田藩と会津藩の激戦をたどる戦跡であると同時に、その後の赤谷炭鉱の開発など、「歴史文化の厚み」を見ることができるエリアであるが、そのことに注目する観光関係者は多くはない。

山内口留番所公園石碑（2018 年 11 月筆者撮影）

1868 年に赤谷で行われた戦いは、新政府軍が勝利し、会津藩は津川（現新潟県阿賀町）へ敗走する。新政府軍が兵力でまさっていたが、会津藩の抵抗は激しく、新発田藩にも多くの犠牲が出たとされている。現在の新発田市中々山に、「角石原古戦場跡」という看板と「角石原戦跡」と記された石碑が立っている。一方旧会津藩領の赤谷地区に入ると、「會藩戦死碑」と書かれた石碑とこの石碑について解説する看板が立っており、会津藩の戦死者の名前も表記されている。

「角石原戦跡」と記された石碑（2018 年８月筆者撮影）

會藩戦死碑（2018 年８月筆者撮影）

3-2. 赤谷炭鉱と中国人・朝鮮人労務者

戊辰戦争の後、赤谷は鉱山として開発される。大正時代の 1925 年に赤谷線が赤谷駅まで開通し、1930 年代から炭鉱開発が進むとともに、赤谷線の終着駅である東赤谷駅（1941 年開業）から先にも資源輸送のための鉄道を敷設、輸送体制を整えて、鉱石の増産を行っている。1939 年に操業をはじめた日鉄鉱業赤谷鉱業所は、1977 年に閉山、赤谷線も 1984 年に廃業している。廃止された国鉄赤谷線はその後、新発田駅から角石原古戦場のある中々山まで、サイクリングロードとして整備され、かろうじて痕跡を残している。

赤谷の鉱山開発は、明治期からなかなか進展しなかったが、戦時期の増産体制の強化にともなって一気に加速している。戦時期の鉱山開発における労働力として、中国人及び朝鮮人労働者が働いていたことはよく知られているが、この状況は赤谷鉱山にもあてはまる。鉱山での中国人労務者の徴用については、秋田県大館市で中国人労務者が蜂起した花岡事件の起きた花岡炭鉱がよく知られており、元労務者のインタビューも行われているので、花岡の資料から戦前の中国人・朝鮮人労務者の現状を探る[15)]。

花岡事件は、1945 年 6 月、中国人労務者が蜂起、日本人を殺害、その後鎮圧された事件である。この事件は中国でもよく知られており、中国ではドキュメンタリー番組も放映されている[16)]。労務者の置かれた過酷な労務環境、蜂起した中国人労務者の拷問などの事実が、後に明らかになったことで、日本国内で損害賠償訴訟に発展している。花岡には戦後、中国殉難烈士慰霊之碑や日中不再戦友好碑が建っているほか、2010 年に花岡平和記念館が建設され、資料の展示を行っている。

記念館が整理した資料では、中国人労務者の中には、中国大陸でとらえられた捕虜が含まれている。河北省石家荘の収容所で捕虜を労工として「転換」し、日本国内に送ったという。記念館の資料の中に、中国人労務者の就労状況について外務省がまとめたとされる、「外務省報告書」の資料が転載されており、中国人労務者が働いていた全国 135 の事業所の中に、「日鉄赤谷」が含まれている。

花岡は特に労務環境が悪く、中国人労働者の蜂起につながったとも考えられるが、赤谷の労働環境はどうだったのだろうか。2010 年に発行された、新潟県高等学校教職員組合平和教育研究委員会『新潟県内における韓国・朝鮮人の足跡をたどる』では、日鉄赤谷鉱山の概略図が掲載されており、東赤谷駅の近くに華人合宿所があったとされている。同書では元鉱夫や元雇員であった地元住民証言として、中国人労働者は「板床にわらを敷いたとこ

ろに寝起きし、しらみが多くいた」「ウルイやギボシの茎などをかじる」「よぼよぼしていて、綿入れの服やわらみのを着ていた」と記述している[17]。中国人の逃亡事件が赤谷でも起きており、食料の配給が不十分であったことが、その理由としてあげられている。花岡と赤谷の労働環境を比較検討して評価することはできるかもしれないが、本稿の関心からすると、赤谷も花岡同様に劣悪な環境であったと推測できるだけで十分意義がある。

中国人労働者の強制労働について、花岡はその象徴となる場所として、資料や証言も多く集められ、平和記念館に展示されている。花岡鉱山もまたすでに閉山しており、花岡地区はこうした悲しみの歴史を想起させることのない、静かな集落となっている。しかし、平和記念館や慰霊碑があることにより、花岡事件に関心を持つ人々が大館を訪れ、中国の人々への「加害」について、思いをめぐらせるための装置は用意されている。一方、新発田では、赤谷鉱山自体がすでに忘れ去られており、旧東赤谷駅周辺には、かつて鉱山があったことを示す案内板はなく、鉱山の痕跡を示すものを探し出すことすら困難な状態にある。井出明は著書の中で、北海道紋別市の鴻之舞金山について、閉山後人が住まなくなり、「閉山後に遺構になりうる物的施設がほとんど撤去されてしまっている」と指摘する。「人々の思いが化体されたハードウェアは地域の記憶の承継を可能ならしめるが、ここ鴻之舞金山跡の物的な存在を欠いた場で理解できるのは、まことにもってアイロニカルな状況」という井出の鴻之舞金山への評価は、現在の赤谷鉱山にも当てはまる。赤谷鉱山の歴史をどのように記録し、共有していくかは、物的な存在がほぼ失われた状態にある中で、難しい状況にある。

戊辰戦争での赤谷での戦い、赤谷鉱山での中国人・朝鮮人の労働、いずれも観光協会が前面に押し出す観光コンテンツとはいいがたい。しかし、この赤谷地域に残っている遺構を整理し直して、悲しみの記憶を巡るモデルコースを用意しておくことで、地域観光情報として結晶化させ、個人の観光に結びつける可能性はある。もし、新発田市のメインの観光コンテンツに位置づけるのが難しかったとしても、「堀部安兵衛を偲ぶ旅」とならぶような形で、「戦争と人間を考える赤谷の旅」をひっそりと提案するということも考えられる。

3-3. 軍都新発田の歴史と悲しみ

明治維新後の新発田は、陸軍が駐屯する軍都として城下町から生まれ変わり、繁栄している。明治 17 年に編成され、新発田に駐屯した歩兵第 16 連隊は、日清戦争以後、太平洋戦争までの激戦にすべて参加したとされている。新発田連隊の勇猛さは地元にとって誇らしい存在であったかもしれないが、同時に多くの犠牲を出しており、その「悲しみ」を記憶する施設も多数残されている。

たとえば、陸軍の兵舎として 1874 年に建設された「白壁兵舎」は、その代表例であろう。フランス式の兵制に基づきつつ、建物は和洋折衷で作られているこの建物は、2014 年に自衛隊の広報資料館としてオープンし、新発田城周辺でひときわ目をひく建造物となっている。資料館内部には、陸軍歩兵第 16 連隊など新発田駐屯地の連隊の装備品や写真資料が展示されているほか、陸上自衛隊の災害派遣、国際貢献の様子も展示されている。

白壁兵舎内部の展示では、「戦史」を客観的に展示しており、特定の政治的な立場を強調しないよう意識されているが、新発田連隊が太平洋戦争の激戦地を転戦していく経緯が地図に示され、同時に戦病死者も示されている。ガダルカナルやビルマでの戦いの厳しさを生々しく伝えているわけではないものの、一定の想像力を働かせれば、その悲惨さを感じ取ることは可能になっている。

大東亜戦争における歩兵第 16 聯隊作戦行動図
（白壁兵舎展示資料、2017 年 11 月筆者撮影）

白壁兵舎から数分のところにある新発田西公園には、新発田駐屯地から戦地に赴いた人々の慰霊碑が集中して設置されている。日清戦争の犠牲者を慰霊する越佐招魂碑、ビルマ戦慰霊平和塔、ガタルカナル島戦記念碑などの慰霊碑が並ぶ一方、これらが噴水や遊具と共存しており、日常的には慰霊の場というよりも、子どもたちの遊び場、市民の憩いの場という雰囲気が保たれている。ただビルマ戦慰霊平和塔は、ビルマのパゴダ風の建造物であり、越佐招魂碑も巨大な剣の形をしており、戦争との関連性を想起するのは難しくない。毎年５月３日には、この公園で越佐招魂祭が行われ、遺族が集まって慰霊を行っている。

新発田西公園のビルマ戦慰霊平和塔
（2018 年８月筆者撮影）

これら新発田の軍都としての歴史に関わる場所の情報も、その性格上オフィシャルな観光情報としては扱いにくいようで、市内中心部にあるにもかかわらず、新発田市が発信する観光情報での位置付けは弱い。白壁兵舎は外観の美しさからとりあげられることはあるが、新発田西公園に光が当たることはほとんどないと言ってよい。白壁兵舎は自衛隊の広報施設として、客観的な「戦史」の展示につとめているが、想像力を働かせることができれば、戦地の悲惨な状況を理解することは可能である。白壁兵舎からさらに新発田西公園に立ち寄ることで、新発田から国外に出ていって戦病死した兵士やその遺族の悲しみを感じ取ることもできる。

おわりに

本稿では、ダークツーリズムを中心とする個人旅行の新しい可能性がどのように開けるのか、新潟県新発田市を題材として考察してきた。「観光」といっても、ダークツーリズムの関係する領域というのは、「見る、食べる、遊ぶ」のうちのとりわけ「食べる、遊ぶ」との関連性が弱く、観光「産業」の振興にどのように結びつくのかという問題がある。またダークツーリズムスポットは、多くの観光客が訪れるような地域にあるとは限らない。公共交通機関が十分に整備されていない地方都市では、アクセス手段をどのように確保していくかという課題も抱えている。本稿でとりあげた赤谷炭鉱に通じるバス路線は、2018 年 4 月のダイヤ改正により旧赤谷連絡所前から東赤谷までの区間が廃止となり、旧東赤谷駅まで公共交通でアクセスできなくなっている[18)]。

新発田市には、年間 50 万人と県内トップクラスの集客力を持つ月岡温泉があるものの、この集客力が新発田市内の他の観光資源に波及していないのは、公共交通機関と同時に、それぞれの観光スポットの持つストーリーに多様性が見られないことも原因と考えられる。それぞれの関心に応じたカスタマイズされた観光の中に、これまであまり注目されてこなかった地域の歴史・文化を組み込み、それも光と影の両面から掘り起こすことは、新発田地域については可能で、とりわけダークツーリズムの手法により、新発田観光に新たな可能性を生み出すことができるかもしれない。

また、地域や国境を超えて、関心をつないでいくという視点も考えられる。ミャンマーに行けば新発田西公園にあるようなパゴダを見ることがあるであろうし、中国に行けば日本の鉱山での労務者の徴用に関する資料を目にすることもある。ミャンマーや中国を旅した人々が、たまたま月岡温泉を訪れた際に、新発田西公園や赤谷炭鉱のことを知り、訪ねていく可能

性もある。こうした点と点をつなぐような観光の導線を設計することも、大きな可能性を有している。

本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）18K12000の助成を受けたものである。

註

1) 2017年３月に発表された「新潟県観光立県推進行動計画」にも以下のような表現が見られる。
「本県においては、四季折々の豊かな自然、新鮮でおいしい食べ物、数多くの温泉、文化、歴史その他の観光に生かすことができる資源が集積しており、また、首都圏、東北及び北陸を結ぶ交通の拠点であるとともに、北東アジア交流圏の我が国における表玄関でもあるなど、観光立県を実現するための大きな可能性を有しています。」
「新潟県観光立県推進行動計画～うまさぎっしり・魅せる新潟アクションプラン～」（平成29年３月）＜http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Simple/25/518/niigata-kanko-keikaku29-32.pdf＞（2018年11月28日最終アクセス）

2) ダークツーリズムに関する井出の論文は多数あるが、最近の著作として以下が挙げられる。
井出明『ダークツーリズム悲しみの記憶を巡る旅』（幻冬舎新書、2018年）、井出明『ダークツーリズム拡張―近代の再構築』（美術出版社、2018年）

3) J. John Lennon, Malcolm Foley, “Dark Tourism”, Cengage Learning EMEA, 2000

4) 井出明「ダークツーリズムと観光学」第20回進化経済学会東京大会報告資料（2015年）

5) 井出明「ダークツーリズムと情報技術」情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ（CH）、2014年、４頁。井出は日本航空123便が墜落した群馬県上野村の事例をあげ、山あいの観光地としてのPRを紙媒体を含めて行いつつ、ウェブでは「慰霊登山」に関する情報を提供して、適切に情報提供していると評価している。

6) 新潟県観光統計情報＜http://www.pref.niigata.lg.jp/kankokikaku/1245960085415.html＞（2018年11月27日最終アクセス）

7) 観光庁宿泊旅行統計調査＜http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/shukuhakutoukei.html＞（2018年11月27日最終アクセス）

8) 「新潟県観光立県推進行動計画～うまさぎっしり・魅せる新潟アクションプラン～」＜http://www.pref.niigata.lg.jp/kankokikaku/1356863951262.html＞（2018年11月27日最終アクセス）
この他の数値目標は、以下の通りである。
県全体の満足度「大変満足」の割合19.3％（平成26年秋～27年夏）→ 40％以上（平成32年）
新潟県リピート率　53.8％（平成27年）→ 58％以上（平成32年）
延べ宿泊者数10,260千人泊（平成27年）→ 1,000千人泊以上の増加（平成32年）
１人当たり平均宿泊数　1.30泊（平成27年）→ 全国平均値以上（平成32年）
大規模コンベンション（学会、大会、会議等の催し物）の開催件数　356件（平成27年度）→毎年度345件を上回り、かつ「大会、学会等」を毎年度70件以上開催する（平成32年度）

国際会議の開催件数　30 件（平成 27 年）→ 34 件（平成 32 年）

9) 日本政策投資銀行新潟支店「新潟におけるインバウンド推進に向けて−（桜、紅葉、雪）×（歴史）×（和食）が誘客増のカギ」(2018年８月)＜https://www.dbj.jp/ja/topics/region/area/files/0000030811_file2.pdf＞(2018年11月27日最終アクセス)

10) 「義理と人情、堀部安兵衛を偲ぶ旅」(しばた観光ガイド)＜http://shibata-info.jp/model-horibe＞(2018年11月29日最終アクセス)

11) 実施主体は、新発田市歩く旅のまちづくり推進協議会である。文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業」(2015年)＜http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/pdf/h25_26_pamphlet.pdf＞(2018年11月27日最終アクセス)

12) 新発田市歩く旅のまちづくり推進協議会「新発田市市街地文化遺産活用構想」(2014年３月発表)

13) 新発田市歴史的景観形成建造物＜http://www.city.shibata.lg.jp/machidukuri/machidukuri/keikankeikaku/1001282.html＞(2018年11月27日最終アクセス)

14) このほか、新発田市内の歴史的建造物を国登録有形文化財に登録しようという動きも見られる。2017年には、平久呉服店、長徳寺、顕法寺、三光寺、吉原写真館が同時に登録を受けている。「県内16件有形文化財に」(新潟日報2017年７月22日朝刊)

15) 本調査では、2018年８月３日に花岡平和記念館を訪問して調査を行ったほか、同記念館作の資料集『花岡平和記念館　記憶を心に刻む』を参照した。このほか花岡事件に関する資料としては、野添憲治『花岡事件の人たち〜中国人強制連行の記録』(社会評論社、1975年）が詳しい。

16) たとえば、2011年８月には、中国中央電視台（CCTV）制作の「见证」という番組で、「1945：冲出集中营」と題し、花岡事件に関するドキュメンタリーを放送している。番組内容はインターネット上で公開されている。「1945：冲出集中营《见证》(上) 20110822」＜http://tv.cctv.com/2012/12/15/VIDE1355586704830861.shtml＞「1945：冲出集中营《见证》(下) 20110823」＜http://tv.cctv.com/2012/12/15/VIDE1355586725095292.shtml＞（いずれも2018年11月30日最終アクセス）

17) 新潟県高等学校教職員組合平和教育研究委員会『新潟県内における韓国・朝鮮人の足跡をたどる』(2010年)、14頁。

18) 路線バスの運行変更のお知らせ（新発田市）＜http://www.city.shibata.lg.jp/kurashi/kotsu/bus/1006273/1006116.html＞（2018年11月30日最終アクセス）